

昭和三十五年七月二十五日發行第
三種(每月一回、便物認可)

(通第一三六号)

慈光

意訳唯信鈔

花田正夫

第十二卷

第七號

意訳唯信鈔

まえがき

『唯信鈔』は聖覺法印が五十五歳の御時、それは丁度法然聖人の御滅後十年目の八月十四日に書き上げられたものであります。

その当時、流罪、死罪、念佛停止の法難からすでに十五年を経ていましたが、南都、北嶺の聖道門の人々からの非難と攻撃はきびしく、法然聖人の廟所を何度も移転せねばならぬという有様がありました。そして法然聖人の『選択集』への駁論がはげしいので、隆寛律师は見るに見かねて、その破邪をせられた時、そのために律师は流罪になりましたのも、これから六年後の出来事であります。

こうした時、『選択集』を体解せられた法印が、これをやわらげくださいて、何人にも分り易く、懇切丁寧に一般の信者に頒つて下さったのであります。法然聖人亡きあと、誹謗の風に吹きさらされている念佛の行者にとっては、何という力強いお手引きであつたでありますようか。又異義に迷う者にとつては、何という有難い灯火であつたでありますようか。

これというのも、聖覺法印御自らが、聞法のおよろこび

から、やむにやまれぬ力のうながしによつて、筆を執らずに居られなかつたからであります。法印の御法語にも、

「……然るに我大師聖人（法然聖人）は、釈迦の使者として念佛の一門を弘めたまい、善導の再誕として称名の一行を勤めたまえり。專修專念の行これによりて弘まる。……然れば則ち破戒罪根の輩、肩を加えて往生之道に入る。下智浅才の類、臂を振つて淨土之門に赴く。誠に知りぬ、無明長夜の大燈炬なり。何ぞ智眼の闇きを悲しまんや。生死大海の大船筏なり。豈業障の重きを煩わんや。つらく、教授の恩徳を思うに、實に弥陀の悲願に等しきものか。骨を粉にしてもこれを報すべし、身を摧きてもこれを謝すべし。」

と切々たるものがあります。

また法然聖人は「聖覺はわがこころを知れり」とも「わが亡き後に、念佛往生の義すぐにいわんずる人は、聖覺と隆寛なり」と常に仰せられて居ります。

親鸞聖人は、五十八歳の時、法印の真筆の本鈔を関東で

せて頂きます。然し意訳は、原文をお読み下さる懸け橋になればとの願いで作りましたもので、そのいとくちにもなれば、望外のしあわせであります。

さてこの意訳を終えまして、深く感じました事は、本鈔と『歎異鈔』のつながりであります。本鈔は「選択集を知らんと欲せば唯信鈔を読むべし」と開悟院講師も讀んでいらっしゃますが、その筆法を借れば、「教行信証を知らんと欲すれば歎異鈔を読むべし」とも申すことが出来ます。そこに、法然聖人—聖覺法印、親鸞聖人—唯円大徳、の一味の流れを第一に知らされます。

次には、晩年の聖人に師事した唯円房が、聖人の御勧めによつて本鈔を精読し常に座右に置いて繰り返していきましたが、そこには想像に難くない事であります。そこに『歎異鈔』の中に自然に本鈔の言葉がにじみ出ているのを見出すことが出来ます。

(一) 十三章に、「唯信鈔にも、弥陀いかばかりの力まし

ますと知りてか罪業の身なれば救われ難しと思うべき」と本鈔を直接に引文せられてあります。

(二) 総結文に、「故聖人の御心にあいかないて御用い候御聖教どもをよく／＼御覽そらうべし」とあります。

これは本鈔などを申されたことは明らかのことであつま

と讀えて居られます。

おそまきながら、私もこの親鸞聖人の御勧めにうながされて、『唯信鈔』をゆっくり拝読申したいと長年願つて居りましたが、本年春頃からすこしづつ意訳を試み初め、曲りなりに出来上りましたので、思いきつて慈光誌に発表さ

す。そして『末灯鈔』で聖人が本鈔を御勧め下さつたお言葉をそのまゝに引用されてあります。

(三) 一章に「弥陀の本願には老少善惡の人を選ばれず、ただ信心を要とすと知るべし、そのゆえは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願云々」とあり、本鈔には「仏力無窮なり罪障深身の身を重しとせず。仏智無辺なり、散乱放逸のものを捨つることなし、ただ信心を要とす、そのほかをばかりみざるなり」とあります。

(四) 九章に「よろこぶべき心をおさえてよろこばせざるは煩惱の所為なり、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたことなれば、他方の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりと知られていよ／＼たのもしく云々」とあり、本鈔には「もとより獨世の凡夫なり。ことにふれてさわりおゝし。弥陀これをかかみて、易行の道をおしえたまえり。ひねもすにあそびたわぶるは散乱増のものなり。よもすがらねむるは、睡眠増のものなり。これみな煩惱の所為なり、たちがたく、伏しがたし。遊びやまば念佛となえ、ねぶりさめば本願をおもいすべし。専修の行にそむかず云々」

(五) 十五章に「真言、法華を行する淨侶なおもて順次生の覺をいのる」とあり、本鈔ではここを詳しく述べてあります。

(六) 両鈔の構造の相似であります。前半に顕正、後半に破邪、歎異、の条々があげてあります。

以上の外、なお沢山あることと思いますが、これらにより、両鈔は、姉と妹、兄と弟、という関係にあり、両鈔を合せ鏡にするとき、教えられることが多いと愚考いたします。

さて本年秋は池山先生の二十三回忌にあたります。先生は歎異鈔を最初は獨乙語に翻訳せられ、次で大正九年に意訳せられました。今度私が意訳の唯信鈔を発表させて頂きましたことも、全く先生の御恩のいたすところであります。

終りに、この意訳にあたりまして多田鼎先生の唯信鈔の解説、佐々木とし子女史の『新説唯信鈔』、藤枝昌道氏の『聖観法印の研究』開悟院講師の『唯信鈔講義』松野純孝氏の『親鸞』等々に教えられたことの多いことを附記して、御礼申し上げます。

昭和三十五年六月四日。亡き母の日稿了。

一道庵 花田 正夫

目 次

- 第一章 生死いづべき道
第二章 聖道門
第三章 净土門
第四章 故異の条々
第五章 総結文
- 一節 諸行往生
二節 念仏往生
(1) 念佛往生の主旨
(2) 本願にかなう理由
(い) 如來の淨土選択
(ろ) 如來の生因選択
(は) 諸佛称揚の願(第十七願)
(に) 念仏往生の願(第十八願)
(は) 疑問を釈す
(4) 専修と雜修
(い) 二修の模様
(ろ) 二修の優劣
- 一節 十念と十声
二節 臨終と平生
三節 宿業の障否
四節 宿善の有無
五節 一念と多念

唯信鈔

安居院聖覚御作

一章 生死出ずべき道

はてしのない生死の境界をはなれて、大いなる覺の道を成し遂げようと願うについて、ここに二つの道がある。一つには聖道門、二つには淨土門である。

二章 聖道門

聖道門というのは、この苦しみと障りの多い人生にあつて、証をひらこうと励むのである。その聖道門の至極といわれているのが真言と法華である。
真言の密教の本意は、この身このまま仏の大覺の位にのぼろうと思い、法華一乘の教の意趣は、この世にあつて、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの根を淨めて、そこに自在なさとりをあらわそうと願うのである。

まことに聖道の教の本意から云えば、そうあるのが当然であろうけれども、現在は釈尊の御入滅後すでに年久しく、いやがうえにも濁りに濁る末の世にあつて、この身のままに覺を得るということは、何億、何十億の人々のうちにたつた一人もむつかしいことである。

そうであるから、現在この道を修行する人々は、この身のなりに証を得るというようなことは、とても及びもつかぬことだから、自然に途中で心がくじけてしまい、或者は弥勒仏が世に下られるという五十六億七千万年のはるかなる後の夜明けの空にねがいをかけ、或者は何時とも知れぬとおい未来に出世せられるという後仏の御出現を徒らに待ちながら、生れかわり死にかわりつつ、はてしない生死の海に流転して、くらい闇路にまどうしている。

また、或者はわずかに釈尊の御跡の靈鷲山の聖地や、觀世音菩薩の補陀落の靈地に生れようと願い、或者は、せめても天上界か人間界に生れて、ふたたび仏道をおさめようというような小さな果報にのぞみをかけている。

そのようにして仏縁の結ばれることは、まことに尊いことではあるが、この世にあつて速に証を得るということは、とても空しい願いと思われる。かくて心くじけた人々が天上、人間の果報を願うても、なお皆迷いの境界であり、それは、輪の廻るように苦界をいつまでもへめくらねばならないところである。それなのにどうしていろ／＼

さまづの行を積み、智慧をみがいて、そうした小さな果報をもとめるのであらうか。
さてこれ程に聖道の門の完うしがたいのは、まことに大聖世尊の御世から長い年月を経たためと、御教の道理が深いのに、人々の智恵が浅く短くて、とても汲み取り難いためであらうか。

三章 淨土門

ふたつに、淨土門というのは、この世でおさめる行業をありむけて、次の世で弥陀の淨土に生れて、そこでは死の難も、惡知識も、紛れ易い他の教もなく、煩惱の雲霧にさまたげられることもなく、常に仏に導かれたながら、自利利他の菩薩の行をかけめなく成就して仏に成ろうと願うのである。この門は末代の吾等の根機に相応していく、まことに行きとどいた教である。

この淨土門にまた二つの道がわかっている。一つには諸行往生で、諸善万行を積んで、その力で淨土に生れようと願う道であり、二つには念佛往生で、念佛して淨土に生れる道である。

〔一節〕諸行往生
諸行往生について詳しく述べ、あるいは父母に孝養をつくし、あるいは恩師や長上によくつかえ、あるいは五つ

これらの夫々の行を弥陀仏に廻向すれば、淨土に生れられないことはない。諸の行を廻向する者はその人の臨終に、仏のお迎えをうけて淨土に導き入れられるであろう、と仏がかねてお誓い下されてあるから。ただこれは、自分の力をもととして行をはげんで淨土に生れようと願うのであるから、自力の往生と呼ばれている。もしも行業がおろそかになれば、往生は遂げ難い。これはかの阿弥陀仏の運びとされた本願の行ではなく、したがつて摄取して捨てたまわぬという大悲の光明にも漏れるのである。

(二節) 念仏往生

(1)

次に念佛往生というのは、阿弥陀仏の名号をとなえて、往生を願うのである。

この行は、阿弥陀仏の本願にかなうた道であるから、正定の業となづけられている。この道は、ひとえに仏の本願力一つに導いて頂くのであるから、他力の往生となづけられている。

註 ① 正定の業とは、正しく淨土に生れるに定められた業因をいう。

(2) 本願相応の理由

そもそも名号を称えることが、どうして弥陀の本願にかなうのかと言えば、その仏願の生起本末から申さねばならぬ。

(い) 如來の淨土選択

さて、阿弥陀如来がいまだ成仏されなかつたむかし、法藏菩薩と名号つておいでになつた。そのとき仏が御出現になつていて、その御名を世自在王仏と申上げていた。この仏の説法を聞かれて、菩薩はすでに仏の大覚を得ようといふ願いを発起し、先ず清淨な國土を建立して、あらゆる衆生をむかえて、一味の覺を得ようと、大いなる志願に燃

えて、世自在王佛の御前にお立ちになり
「私は菩提心を發起して、清淨の仏国を建てたいと思
立ちはだかりました。仏よ、どうか私のために、國土を莊嚴する
ための量りない、すぐれて不思議な行をお教え下さい」
と、お願いになつた。
そのとき、世自在王仏は、三百十億の淨土をことごとく
眼前にあらわし給うて、その淨土と、その衆生の、善きも
悪しきも、勝れたるも劣れるも、残るところもなくこれを
説きしめさせられた。

法藏菩薩は、これを聞かれ、これを御覽になつて、惡を
えらんで善をとり、粗雜なものをすててすぐれたもの願
われました。たとえば、第一の願には地獄・餓鬼・畜生など
の三惡道のある國はこれを選びて、三惡道のない國を
願いとするというようにして、順々に四十八通りの大願をお
おこしなつた。

かようにして、① 三百十億の諸仏の淨土の中から、すぐ
れたものを選びとられて極樂世界を建立なされた。たとえ
て、柳の枝に桜の花を咲かせ、二見の浦に清見が閑
をならべるようにして、すぐれてよきものをおあつめにな
ることにかかりはてられて、實に五劫という永い間の
御苦勞をお続けになつた。

註 ① 華嚴經には蓮華藏世界におさまる淨土は無

量であるが、しばらく数によせて二百十億とかぞへさせられている。

(ろ) 如來生因の選択

このようにして、たえにすぐれて、いつくしきよらかな國土をもうけようと願い定められて、さらに思いめぐらされるに

「淨土を建立することは、あらゆる衆生を導きいれよう

がためである。それだから國土が如何にすぐれていようと
も、衆生が生れ難いのでは、仏の大悲大願の意趣にそわな
いことになる。これによつて、往生極樂のために、特別の
因を定めようとなされたが、どの行もくみな容易なもの
はない。父母に孝養する者を生れさせようすれば、不幸
の者はうままれることが出来ない。大乗の經典を誦誦し、心
に常に受け持つことを因とすれば、文字を知らぬ者は望み
を絶たねばならない。布施の行や、戒律を持つことを因と
定めようとすれば、懲貪(オシミムサボル)、破戒のとも

がからはもれてしまうことになる。忍辱(シノブココロナリ)
精進(モツバラスヌ)を業としようとすれば、瞋恚
(オモテノイカリ、ユヨロノイカリ)、懈怠(オコタルコ
コロナリ)の人々は捨てられてしまうであろう。そのほか
の一切の行についてみても亦、みなみなこの通りである。

こういうことであるから、ありとしあらゆる、善凡夫

如來尊号甚分明

無碍光如來のみ譽いの

大慈大悲の御名こそは

わかつみちびき給うこと
いともすぐれてあきらげく

十万世界普流行

十方世界にあまねくも

ひろくきわなくひろまりて
凡夫、聖者のへだてなし

但有称名皆得往
ひとえに御名を称う人

ひとしくうまるる道なれや

觀音勢至自來迎

信心のひとをみそなわし

影の形にそごとく

觀音勢至はもろともに

まもりみちびき給うては

淨土のさとりに入れたまう

と、法照禪師が讃えられたのも、この願の思召しを汲ま

れのことと思われる。

(に) 念仏往生の願

つぎに第十八願に、念仏往生の願をおこされて、十声念佛

申して生命終る者をも、お淨土に導き入れずばおかぬと

おちかい下されている。

まことに、よく／＼これをおもうのに、この御本願はき

わめてひろく、非常にふかい思召しである。名号はわずか

に阿弥陀の三字であるから、法文の一偈さえも覚えられな

かつた愚者の周圍弊特のようなものでも容易く覚えたもつ

ことが出来る。またこれを称えるについて、善導大師は、

行・住・坐・臥をえらばずと教えられ、これを行するにつ

いて源信僧都は、時間も場所も諸縁の如何も心配はいら

ぬとのべられている。これを思うに、弥陀の本願は、在
・出家・男女・老少・善惡の者のわけへだてのない、広大
無辺なおまことであるから、おすくいからもれる者は誰一
人もないことが知らされる。

彼仏因中立弘誓

わがみほとけは法藏と

名告りてわれらが世におりて

ひろきちかいをたてましひ

わが名を聞きてわすれずば

われはすべてをおさめなん

聞名念我總來迎

生きになすめる貧人も

富み榮えたる貴人も

えらび給わぬ大悲なり

愚かにつたなき者もまた

智恵すぐれたる人々も

へだて給わぬまことなり

よくききたもつ人もまた

きよき仏制をまもる身も

なおも憐み給うとぞ

まして戒律たもち得ず

罪の根深く重き身を

ことに憐れとのべ給う

不簡下智与高才

不簡多聞持淨戒

不簡破戒罪根深

但使廻心多念佛

そのみまことをたのみでは

よしとあしとをうちすてて

みめぐみの御名称えなん

いしかわらつぶての如き罪業の

醜がこの身もおそるるな

変えて黄金となさんとの

不思議のちかいますものを

慈愍三藏が、かようにつたえられたのも、この大願のこ

ころでありますよう。これを念仏往生と申すのである。

(3) 念仏の易行道

竜樹菩薩の①『十住毘婆娑論』のなかに

「仮道を行ずるのに、難行道があり、易行道がある。難

行道というのは、海路に順風を得たようなものである。易

行道といふのは、陸路を徒步で行くようなものである。易

行道といふのは、海路に順風を得たようなものである。

その難行道といふのは、この②五濁の世にあつて、自ら

つとめ励んで、あともどりすることなく、必ず成仏出来る

といふ位を得ようとおもうことである。また易行道といふ

のは、ただ仏を信することによつて淨土にうまれる道である。」

と説かれている。

註 ①十住毘婆娑論は、菩薩の十地の段階と修行

つぎに、この念仏往生の門について、専修と雜修との二つの行がわかっている。

(4) 專修と雜修

つぎに、この念仏往生の門について、専修と雜修との二

(い) 二修の模様

専修といふのは、極樂をねがうこころを発起し、本願を

たのむ身になつて、たゞ念仏の一行をつとめて、すこしも

余行をまじえないことである。他の經文や咒文などをとな

えず、余の仏や、菩薩をも念ぜず、ただ弥陀の名号をとな

え、ひとえに弥陀一仏に帰しまつることで、これを専修と

呼ばれている。

雜修といふのは、念仏を主とはしているけれども、また

余の行をならべて修し、他の善をもかねて行うて、往生の

たすけと/orするので、念佛に余行、他善をあわせて「鬼に金棒」ときめることである。

(ろ) 二修の優劣

この二つのなかでは、やはり専修がすぐれている。そのわけは、すでに一筋に御淨土を願ううえは、淨土の教主であらせられる阿弥陀仏を念じたてまつるほかに、どうしてよそごとをまじえる必要があろうか。『心地觀經』にも、我等の生命は、電光や朝霧の如くみじかくもろい、と説かれ、『涅槃經』には、芭蕉の葉のように破れ易く、泡沫のよう消えやすい、と教えられている。こうした身をもちながら、一生念佛申してもむずかのあいだのことで、今にもしけず生命終つて、五つの惡道を離れようとしているのである。そうしたあやうい身をもちながら、どうしてゆる／＼と諸行をかね修するいとまがありましようか。

諸仏や諸菩薩との結縁は、淨土に生れて、自在に諸佛を供養出来る身となれる往生成佛の朝を待とうではないか。大乗や小乗の經典の深いわけがらは、①あらゆる法門を明らかにさせて頂ける往生成佛の夕を待つべきである。いまとしては、余行のことは一切無用のことである。

①観經上品下生者の往生の時、三小劫を経て
百法明門を得て歡喜地に住すと華嚴經を引いて善導大師が釈しておられる。

故使如來選要法

隨縁雜善忍難生
万行、諸善のちからもて
うまるることはかたからん
わが身の根機もかえりみぬ
とわの覚のみやこには
されば如來は要法を

さて念佛門に入りながら、なお余行をかねて修するひとのところをおしはかつて見るのに銘々がかつて修めた行業に執着して、捨て難く思うからである。或者は法華一乘の教をたもつて居り、或者は真言の身、口、意の三業を大日如來の三業と等しくする不思議な行を修めている人など、夫々に、その行をふりむけてお淨土に生れようとの願を持つたまんま「念佛にならべてこれをつとめるのがどうして悪いのであるうか」と思うている。

然し、直ちに、本願にかなうて易行のお念佛をつとめないで、なお本願に選びわけられた諸行をならべて修することとは、まことに、道理のないことである。

それゆえ、善導大師の『往生礼讚』の中に、

「もつぱら念佛申すことをして、種々の行を雜える者は、千のなかに一人も往生はむつかしい。もしひとすじに念佛する者は、百人中百人が生れ、千人中千人が生れる」と、その得と失とをあきらかにせられている。また、

極樂無為涅槃界

よろずのたのしみ極まれる

われらがたために選びてぞ
教念弥陀專復專
教えて弥陀を念ぜしめ
この一行をひたすらに
ひたすらなれとのべ給う
と大師は『法事讚』にお述べになつてゐる。
ここに善導大師が、隨縁の雜善ときらわれるのは、念佛申しながら前から修めていた行に執着してそれをはなさぬからである。それを譽えて言うと、宮仕をする場合に、主人にちかづいて、したしみたよつて、ひとすじにまめ／＼と心をはこんで、この人が主人にあつて、自分をよくとりなして貰いたいと望むようなものである。ぢき／＼に隔なくよくつかえるのと、かように隔のあるのと、どちらがすぐれ、どちらがおとつてゐるかは、云わざとも明らかであろう、二心であるのと、一心であるのとは、天と地とのはるかな相違である。

(は) 疑問を解す

かのように言うと人が疑をおこして、

「たとえば或は、念佛を毎日に一萬遍を称えて、そのほかは、終日遊びくらし、夜は夜もすがらねむりあかすのと、また或人は、同じように念佛を一萬遍申して、そのの

けれども、これをよく考えて見るのに、やはり専修がすぐれている。そのわけは、もと／＼濁世に生れ、煩惱をかけめなくそなえた凡夫であるから、何かにつけて障りが多いことである。阿弥陀佛は、このことをすべてみ胸におさ

ぬ」と云う人がある。

かのように言うと人が疑をおこして、

「たとえば或は、念佛を毎日に一萬遍を称えて、そのほかは、終日遊びくらし、夜は夜もすがらねむりあかすのと、また或人は、同じように念佛を一萬遍申して、そのの

(5) 唯信の大通

(い) 三心のこころ

められての上に、一切の衆生をもれなく救い遂げようため
に、称え易く、たもち易い念佛の道をおさすけ下さつたの
である。ひねもすあそびたわむれるのは、散乱のはげしい
性質のものである。夜もすがらぬむりあかすのは睡眠煩惱
のさかんな性質の者である。これらは皆煩惱のなしわざで
あるから、断つことも、調伏えることもむつかしいことで
ある。けれども遊びがやんだなら念佛を称え、ねむりから
さめたなら本願を思い出しなさい。

それと、念佛をもつぱら申して、その数一万遍に及んだ
のちに、他のお經を誦え、余の佛を念じるというのは、一
寸聞いたところは、非常に立派なようではあるけれども、
誰が念佛は一万遍にかぎれど定めたのであろうか。精進の
出来る性質の人であれば終日称うべきである。されば念珠
をとれば、弥陀の名号をとなえ、本尊に向えは弥陀の御像
を拝みなさい。そしてまつすぐに弥陀佛をたのみなさい。な
んのために八菩薩のおてびきを待つ必要があろうか。もつ
ぱら本願の御導ひとつをたのみなさい。わづらわしく法華
一乗の機能をかりるにはおよばないことである。

が因位の時、法藏菩薩とお名告りになつて、菩薩の自利・
利他の行をたて、淨土を建立なさるにつけても、一念一刹
那も真実ならぬはなく、清淨ならぬはなく、そうした限り
ないおまことの上に成就なされたのである。それゆえ、こ
のお淨土には、虚偽の心をもつては生れることは出来な
い、ぜひとも、真実の心をおこさねばならない。

その真実の心というのは、まことならぬ心をしてて、内
も外もまことでなければならぬ。それなのに、まことに深
く淨土を願うころもないのに、人に会うては深く淨土を
願うてはいるように語り、また内心には、世間の名利に狂わ
されながら、外相はこの世をばいとうような様子をして居
り、更に、外面には善い心や、賢げな振舞をあらわして、
裏面には善くない心も、わがままな心も一杯ある、こうし
たのを虚偽の心となづけて、真実の心と相違している相で
あるといわれる。これを廻心懺悔して、仏の御真実心をよ
くきかせて頂かねばならぬ。

ところが、このこころを横着に聞きとつた人は「すべて
のことは、ありのままでなければ、虚偽になるであろう」
といつて、世間をもはばからず、わが身の耻になることを
も人にみせつけて、これが虚偽のない心であると言うもの
があるのは、これは大変な間違である。こういうことで
ても嘘を云うはずのない人の言葉であるから、後で、たと

『観無量寿經』には「三心をそなえる者は、必ず淨土に
生れる」と述べられ、善導大師は、これを釈して「この三
心をそなえれば、必ず往生することが出来る。もし一心を
も欠くと、即ち往生は得られない」と仰せられている。

これは、三心のなかで、一心が欠けても往生はむつかし
いとの思召して、信心の大切なことを知らされる。世の中
に、弥陀の名号をとなえる人は多いけれども、往生する人
の極くまれなのは、この三心を具足しないからであると、
よくわきまえねばならぬ。

(ろ) 至誠心

その三心というのは、一つには至誠心である。すなわち
眞実のこころである。全体、仏道に入るには、まずまこと
のこころをおこさねばならぬ。もしもそのこころがまこと
でなければ、この道にすすむことはむつかしい。阿弥陀仏

は、かえつて耻知らずな放逸な罪をまねくことになろう。
いま、真実心というのは、淨土をもとめるこころをさき
とし、おのずから穢土をいとうて、仏の本願を信じまつ
について、まことのこころであれ、との仰せである。必ず
しも耻をさらけ出し、罪科を告白せよということではない。
それらは、その事により、又その時にしたがつて、夫
々に深く考えてとりはからねばならない。
善導大師の御釈にも「内は虚偽でありながら、外ばかり
を、賢げに、また貴げに、如何にも道にいそしんでいる如
く振舞うてはならぬ。」といわれている。

(は) 深心

二つに、深心というのは信心のことである。そこでまず
信心の有様を知らねばならない。さてその信心と云うのは、深く人の言葉をたのんで疑わないことである。たとえば自分にとつて腹黒いところはちつともなく、自分も、深くたのみ、力にしている人が、實際によく見たところを教
えて「そのところには、山がある、かしこには河がある」と知らせてくれたことを、ふかくたのんで、その言葉通りに信じて居れば、その後に、他の人が来て「それは間違つ
ている。山もない、河もない」と云つたとしても、どうし

い百人千人の者が、何と云うとも、それをとりあげないで、もと聞いたところを深く信頼してゆるがないことを信心といふのである。以上はたとえであるが、今、大聖釋尊のお説き下されたことをたのみ、阿弥陀仏の誓願を信じて一心一向な有様も、このようでなければならない。

いまこの信心について二つの相がある。

一つには、我身は罪惡生死の凡夫であつて、はてしのない遠い昔から、今日、今時にいたるまで、生死の海に、ついに沈み、つねに流転して来て、このままでは、いつまでも経つても、まよいから離れる手がかりのたえはてた者であることにめざめさせて頂かねばならぬ。

二つには、これがあわれなばかりに、阿弥陀仏のおこして下された四十八願は、必ずわれら衆生をおさめとつて下さることに間違はないと心をさだめて、すこしも疑う心がなければ、仏の本願のお力にのせられて、たしかにお淨土に生れることが出来ると深く信することである。

さてこの深信について、世間の人々が疑いをおこして常に言うことは、

「仏の御本願を信じないのでないが、わが身の程をかんがえてみるのに、罪や障りの積ることは多く、善い心のおこることはすくなく、心は何時も散り乱れて、一心にな

れず、身は何時までも懈怠に流れて、精進したいということころもすぐかきけされてしまう。仏の本願がどんなに深いと教えて下されても、こんなことでは、どうしてかかる身をおむかえ下さろうか」

と、我身の浅間しさにつけてためらう心をおこす者がある。

この考えは、我身の罪の深いことを苦にしておこす疑いであるから、おこるこころもおこさず、またたかぶることもなく、まことに賢そうであるが、然しながら、仏の不思議なお力を疑うところに咎がある。

さて、これらの人達は、仏のお力は一体どれ程であると知つて、自分のような罪惡の身では、救われまいなどと思つてゐる。『觀無量寿經』には、五逆の大罪人でさえも、臨終によき人のお導きをうけて、十声念佛申した功德によつて、一刹那の間に淨土に生れたと説かれている。まして、煩惱具足の身も幸に業縁なくして、まだあらわにして、煩惱具足の身も幸に業縁なくして、五逆の罪までにいたらず、かつは宿縁の催しにあづかつて念佛申す身にまで育てられて、十声の念佛をすでに越えているではないか。それなのに、一体何を心配することがあらうか。

罪が深いからといって退転せずに、深ければ深いほど、いよいよ、かゝる者のために建立して下されたお淨土よ

と、願力を仰ぎなさい。前に述べたように慈愍三藏は「罪根の深くして、仏の戒を破る者をもえらび捨てられることはない」と説かれている。また、善心がすくないからといつて退転せずに、すくなければすくない程、ます／＼、かゝる者のためにお恵み下された御念佛よと頂いて、お念佛申しなさい。善導大師は「三声念佛して生命終る人も、五声の念佛で終る人も、仏はおむかえ下さるぞ」と仰せられている。むやみに自分をさげすんで、心をおじけさせて、凡夫の浅智慧をもつて、不思議の仏智を疑うてはならない。

たとえて云えど、人が高い岸の下にいて、如何にしてものぼることが出来ないでいる時に、力の強い人が岸の上にいて、そこから綱をおろして、この綱にとりつかせて、岸の上に引きあげてあげよう、といわれた時に、引いてくれる人の力を疑つたり、綱が弱くはなかろうかとあぶなげに思つて、手をのべて執らないならば、岸の上にのぼることはどうしても出来ないことである。ただひとすじに、その言葉に随うて、掌を延べて、この綱をとれば、すぐにのぼることが出来るようなものである。

今、仏の御力を疑い、誓願の不思議力をたのまない人は、仏果菩提の岸にのぼることは難しいことである。ただ御心を仰いで「若し生れすれば仏とはならじ」とお誓い下

されて、私共におさしよせ下される御本願の綱をとりなさい。仏の御力はきわみもましまさぬことで、我々の罪障がいかに深く且つ重くとも心配はいりませぬ。また仏の御智慧は広大無辺でましますので、我等の心がどんなに散り乱れていようと、またわがまゝに流れて如何に耻知らずの生活であろうとも、どこ／＼までもお見捨てになるようなことはない。それであるから、たゞ如來の御眞実を疑いなくいたくひとつが要であつて、我身の愚さも、罪深さも気にかけることはいりませぬ。

さてかのように信心が決定すれば、至誠心、深心、廻向發願心などの三心はおのずからそこにそなわつてくるものである。即ち、本願の御眞実をいただいて疑うことの出来ぬ身になれば、わざと外面をかざることもようのないになり、また淨土に生れさせて下さることに疑いがなければ、いかなる障りにもくじけることのない、廻向發願の心もそなわるというもので、眞実の信心ひとつ定まれば、三心は皆別々のようであるけれども、自然にそのなかにそなわるものである。

(に)廻向發願心

三つに、廻向發願心というのは、その名だけで、その義がわかるので、くわしく説くほどのことでもない。過去から現在まで、私共の身と口と意の三業で修めた善根を廻

向して、お淨土にうまれたいと願うことである。然しこれも、自分の力をもととしてやるのであれば行き詰つて仕舞うのであるが、その駄目な者故に仏の真実心から御廻向下さる、如來廻向のお念佛一つで淨土への願いがかなうのである。して見れば、如來の御真実心を頂く信心一つの中、廻向發願心もこもつてゐるわけである。

四章 歌異の條々

〔一節〕十念と十声

つぎに、本願の御文に「我が名を称えて、いまし十念に及んで命終るとも、若しその者が往生出来なかつたならば、仏とはならない」と仰せられている。いまこの十念といふことについて、人々が疑いをおこして言うのに、「法華に『一念隨喜』」といふのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、緣覚、菩薩の九界の權と、仏界の実の十界平等の道理を明かに觀ずることである。即ち凡夫のおこす一念の中にも十界の心が悉く具足していると達観することである。それなのに、いま經に十念とあるのを、どうして十遍の称名などと心得てよいものであろうか」と申すものがある。

この疑問に対し、「観無量寿經」で下品下生の人、即ち極惡最下の人の往生する相を、次の様に説かれている。

「五逆の罪を犯し、十惡の業を造つて、そのうえにいろいろよからぬことを続けたものが、臨終の時に及んで、初めて善知識のすすめによつて、僅かに十遍の名号を称えて、ただちに淨土に生れる」と示されている。この場合に、心静かに観念するのも、また深く仏を念ずることでもない。ただ口に名号を称えることである。この經に「汝もし念ずること能わんば」と説かれている。これによつて、極惡の衆生の臨終にあたつて、いろいろのくるしみが身に迫つて、仏を心に深く念うことの出来ないことを示されたものである。そこに「応に無量寿仏を称えよ」と説かれている。これは、ただただ仏の名号を称えよとのお勧めである。

その仰せを蒙つて「十念、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」と称えて生命が終るのであるが、仏名を称えたことによつて、一声一声のうちに、願力の自然として、五逆、十惡の罪人のもつ八十億劫のあいだのまよいの罪が除かれ、淨土に生れることが出来た」と説いてある。ここに「十念」とあるのは、ただ称名の十遍のことである。第十八願にあら「乃至十念」とあるのも、これにあわせて見ればあきらかである。

釈せられ

「若し我仏とならんに、十方の衆生、わが名号を称えて、下、十声に至るまで、若し生れずば、正覺を取らじ」という御旨であると『往生礼讚』に述べられている。ここに十声と説かれたのは、御本願の上の十念ということが御名を十遍口に称えることであるぞということを、きわだつてお示し下されたのである。

〔二節〕臨終と平生

つぎにまた、或人が疑いをおこして、

「臨終の念佛は、功德は非常に深いはずである。十声の念佛で五逆の罪業が消滅するのは、臨終の念佛の力である。尋常の時の念佛では、こんな力はあるまい」と申している。

さてこのことについて、よく考えて見るのに、なる程臨終の念佛は功德がことにすぐれていることは經に説かれてゐる通りである。しかしそのわけをよく心得ねばならない。若し人が、いのちが終らうとするときには、いろいろの苦が身にあつまつて、正しい念も乱れ勝ちである。そのようなときに、念佛することが、どうしてすぐれた功德があるのである。このことについてよく考えてみるのに、病が重く、生命も切迫して、わが身もあぶないとなつた時

／＼疑うところはないものである。

これはすなわち、苦しみをいとこうころが深く、救いを求める心が切実であるから、極樂に生れることが出来る

と聞くと、信心がすぐさまおこるものである。それは、いのちをながらえることが出来るであろうということを聞くとすぐ医師や、陰陽師を信するようなものである。そうであるから、もしこの一筋の心であるならば、臨終の刹那に到らないまでも、信心が決定すれば、平生の一聲、一念の功德も、みな臨終の念佛のそれにかわりがあるはずはない。

〔三節〕 前業の問題

また、つぎに世間の人によく言うのは、「たとい、弥陀仏の願力をたのみにして、極楽に往生しよう」と思うても、前世の罪業が知ることが出来ないから、どうして、やす／＼と淨土に生れすることが出来ようか。

業の障りには種々ある。順後業というのは、今生で造つた罪のむきいを今生でうけるというのではなく、次の次にその果報をひくときいている。そうであるから、今生に人間に生れて来たというても、次の世に悪道にむかう悪業を身にもつてゐるかも知れない。その業の力が強く、悪趣の境界に引きこまれたならば、淨土に生れることはむつかしいだろう」という不審である。

この道理も一往尤ものようであるが、これも疑いの網が断たれていないので、自分の浅はかな考え方をもつてあれこれとみだりにはかろうてゐるのである。すべて業は秤の

如きもので、重いものから先ず引き入れるものである。若し自身が悪道におちる業を持つて居れば、人間に生れないで、さきに悪趣に沈むべきである。そうであるのに、すでに人間界に生を受けているのでよく解るではないか。よしんば悪趣に行くべき業因を身に持つていたにしても、その業の力は、人界に生れることの出来た業因の五戒をたもつた力よりも弱かつたということを。若しそうだとすれば、たとい悪道への業を作つていても、その力は、人間界に生れる業因である五戒をたもつた力よりも弱いものであるとすることが知れる。

「それだから、五戒の功力さえもさまたげることの出来ない弱い力をもつて、どうして念佛十声の功德をさまたげることが出来ようか。五戒というのはまだ煩惱にけがれた善業である。念佛は全く清らかな功德である。また五戒は仏の本願にかなつたものでなく、そのおたすけもないけれども、念佛は弥陀の本願に相応し、その導きによるものである。そうした念佛の大功德というものは、地球上で最も尊いとされる十善にもまさり、また、三界の一切の善にもまして居るのであるから、小善根の一つである五戒にまさることは言うまでもない。その極く軽い五戒の力をさえもさまたげることの出来ないほどの微弱な悪業の力で、どうしてか不可思議の念佛の力による往生をさまたげることが

出来ようか。

〔四節〕 宿善の問題

つぎにまた或人は

「五逆の罪人が、十声の念佛で往生したというのは、それまでに積み重ねた宿善によるのである。ところが自分のようなものは、そんな宿善などを積んでいたとは思えない、こうした者がどうして淨土に生れることが出来ようか、そんなことは思いも及ばぬことである」と、疑うものがある。

これもまた愚痴の暗にまよっているために、愚にもつかぬ疑いをかけてゐるのである。そのわけは、迄今に宿善を重ねた者は、今生も善根を修し、惡業をおそれるものである。また宿善のすくない者は、今生に惡業をこのんで、善根はつくらないのが常である。このように宿業の善い悪いは、今生の有様で明らかに知ることが出来る。ところが現在善心がおこらないことによつて、今まで宿善が全くなかつたことがおしはかつて知れる。しかし我等は惡業が重いとは申せ、まだ五逆罪は造つていないし、また、善根は全くないけれども深く本願を信じてゐる。

さて五逆罪の者が十声念佛出来るのも、これまでの宿善によるのであれば、まして、いのちのあらうかぎり、一生

涯お念佛させて頂けることも宿善によることは、疑いのことである。何の根拠があつて、五逆の者の十声の念佛は宿善が深いと思い、私共が一生の間、称名念佛することは、宿善が浅いと思わねばならないのであろうか。

「小智は菩提のさまたげ」と昔からいましめられているのも、このようなことを云うのであるまいか。

〔五節〕 一念と多念

次に、念佛を信じている人のなかに、

「淨土に生れるには信心が先である。ひとたびこの信心が決定してしまつたからは、強いてお念佛申さなくてよい。『大無量寿經』には、すでに「いまし一念にいたるまで」とお説き下されてある。それ故に一念で足りるのである。それを称名の数を重ねることは、かえつて仏の本願を信じていないからである」といつて、念佛をはげむ者を、本当の信者ではないといつて、大層あざけり、非常にそしる者があるということである。

この人達は、第一に、自分達は専修念佛の行者であるといつて、いろいろの大乗佛教の修行を捨て、つぎに、一念で足りると云う「一念義」を主張して、念佛の大行をもとりおとしている。これはまことに、惡魔が手がかりを得て末の世の者をあざむき迷惑するものである。

善

もとよりこの説にも喜いところと悪いところがある。善い万から云えば、往生の業は、一念で足りるというのは、道理としてはその通りであるけれども、返数を重ねるのは本當の信心ではないと言うのは、非常に行き過ぎた言葉である。もし一念ではすくないから、何でも數多く念佛しなければ往生はむづかしいと思うのであれば、それこそ不徹底な信者と言えよう。そうでなくて、往生の業は一念で満足するのはもとよりあるとよく心得てのちに、いたずらにあかし、むなしくくらすうちに、仏恩の深いことがいよいよ身にしみ、自然と念佛も申され、この御真実ひとつを頂いて暮すことの大切さも知れて、ねてもさめてもへだてなく念佛申して、いよいよ仏の功德の廣大さも仰がれ、本願のたのもしさも思い知らされるであろう。

善導大師は「力のつきないかぎりは、つねに称名す」とお述べになつてゐる。これを信の無い人とどうして云えるであろうか。
しかしながら、「一念義」の人はすつかり間違つてゐる。と、これをあざけるといふこともまたつゝしまねばならない。信の一念に、必ず淨土に生れる身に定まるとは『大無量寿經』に示された御文であるから、これを信じないのは、仏語を信じないことになる。

そうであるから、往生は一念に定まると信じて、しかも

法界三宝海 法界にみち給う仏よ、法よ、僧よ

証明一心念

誓明まちふらしをたまえと一すぢにねぎ奉る

哀愍共聽許 哀愍あわいみをたれ給い、共に我が願を許し給え

草本に曰く。

承久三歳仲秋中旬第四日。安居院法印聖覺、草す。

唯 信 抄 書 写

寛喜二歳仲夏下旬第五日。彼の真筆の草本を以て愚禿親鸞（五十八歳）これを初めて書写す。

仁治二歳初冬中旬第九日。彼の真筆の草本を以てこれを書写す。忻求淨土。愚禿親鸞（六十九歳）寛元四歳丙午、三月十四日、愚禿親鸞七十四歳、これを書写す。

唯信鈔文意の撰述と清書。

建長二年十月十八日。親鸞七十八歳、撰述。

康元二年一月十日。親鸞八十五歳、清書。

全年一月二十七日。清書。

正嘉元年八月十五日、親鸞八十五歳、清書。

いのちのあろう限りはおこたりなく念佛申すべきものである。これが正しいお義である。

五章 総結文

念佛についての大重要なことがまだいろいろあるけれども、ざつとこれだけ誌した。然し行きとどかぬことばかりで、これを読まれるひとびとは、さだめておかしく思われるであろう。然しながら、仏の窮みのないみ力ゆえに、信する者も、誇る者も、みなそれが因となつて、必ず淨土に生れることが出来る、と、よき人々は仰せられている。

何とぞ、このはかない夢の世に、交りあつたことを御縁として、次の生に大覚を得させて頂く因となるようにと願つてやまない。若し自分がおくれたならば人に導かれ、自分が先に淨土に生れたならば人を導いて、かくて幾度生をかえても、善き友となつて互に仏道を修めて行き、次の世も、また次の世も、よき知識となつて、共に永い間の迷いの繩縛からの解放を得たいものである。

本師釈迦尊 人天の師と恭いまつる釈迦牟尼尊
悲母弥陀仏 大悲母のごとくまします弥陀如来
左辺觀世音 左辺にたちます觀世音菩薩
右辺大勢至 右辺にたちます大勢至菩薩
清淨大海衆 清らけき海の如く限りなき菩薩達

法印聖覺和尚の銘文抄

然るに、わが大師聖人（法然聖人）、釈尊の使者として、念佛の一門を弘めたまゝ、善導の再誕として、称名の一行を勤めたまう。

専修、専念の行、これより漸く弘まり、無間、無余の勤、今にあつて始めて知らる。

然れば則ち、破戒、罪根の輩、肩を加えて往生の道に入り、下智、浅才の類、臂を振つて淨土の門に赴く。

誠に知りぬ、無明長夜の大灯炬なり、何ぞ智眼の闇きを悲しまんや。生死大海の大船筏なり、あに業障の重きを煩わんや。

註 銘文の文意を建長七年六月二日に、親鸞聖人八十

「勸修御伝」によれば、法然聖人中陰中、六七日、導師聖覺、とあれば、六七日の法要の導師として表白せられた銘文と推定せられる。

